

G7サミット 宗教者による祈りとシンポジウム

# 「隗(かい)より始めよ」

—G7の首脳へ 今、ゲンなら何を言う—

日時 2023年5月10日(水)

会場 カトリック幟町教会 世界平和記念聖堂

小武 正教 広島県三次市東河内町237  
浄土真宗本願寺派 西善寺住職



## 僧侶として問われた戦争責任

1991年7月

イラクがクウェートに攻め込んだ湾岸戦争の時、呉の自衛隊基地前で「掃海艇をペルシャ湾に送るな」と衣を着て声を上げる私に一人の年輩の男性が語ってくれました。

「私は呉の倉橋に住んでいました。赤紙が来た時、お寺の住職さんを訪ねて聞きました。「私は人を殺せば地獄に落ちるとお聴聞してきました。私は今から戦争に行かねばなりません。私は地獄におちないでしょうか」と。住職さんは「お国のためなのだから地獄に落ちることはない」と話されました。私は幸い生命を拾って帰ってきましたが、それから二度とお寺の敷居はまたいでいません。でも親鸞さんは大好きです」と



昭和八年十月十四日 河内村招魂祭講演原稿

西善寺第15代住職 小武憲正 26歳

エー今日は御案内の通り日清日露の戦役に従軍せられて君国のため華々し〜戦死せられた人々の慰霊追悼式であります

世の中に大事業といはれるものは沢山にありますが身命を捨てて国家を護るといふ事程大きな社会事業はないのであります 宣戦の詔勅一度下るや親を捨て子を捨て断ち難い恩愛の絆を断ち、捨て難い故郷を後に見て砲煙渦巻く満蒙の天地へ 昨日は野戦 今日には攻撃 転戦転戦 零下何十度という寒さと闘いうえをしのぎ あらゆる艱難をなめつくして 八千万同朋の生命の護りとして戦場の勇士 実に立派な大事業であります

そしてその大事業に紅一点の魂を入れるものは 春は場に入りて弾雨斜なり 危難なめ尽くして寒愈加わる 屍の山を南无と越え 漲る血の川阿弥陀佛 進み渡るは念仏の道場 天に轟く硫酸弾 地上にくぶくる砲火弾 砲火硫弾色すごく一死生死のその中にも 聞きますぞや弥陀の喚声 あ〜愉快 浄土の使い敵の弾

吾をまつ親の在所が二つある どちらへ帰るも差し支えなし 魂一つ佛にまかせ 身体は国家にささげもの 大和桜の花と散る 真宗親鸞上人の御信仰と一所に勇ましく戦う戦場の勇士 これ位厳しい大事業がありましようか。二千五百有余年、一糸乱れぬ大帝国。世界に唯一君主国たらしめたのは、家を捨て子を捨て己れを捨てて尽くすという犠牲的精神よりほかはありません。

## 戦死したご門徒の葬儀・法事は

### ・「顕彰」か？

- ・聖戦 正しいおこない
- ・英霊 そのための犠牲となった
- ・顕彰 褒め称える

### ・「追悼」か？

- ・実相(加害と被害)を知ることから  
→ 願いへ





中国新聞 2023 2 16



あなたは どう考えますか?

### 何のために戦ったのか 栗原貞子

何のために戦ったのか 誰のために戦ったのか  
夫も息子も帰らなかった 教え子たちも帰らなかった  
広島は二十万人が焼き殺され 暮れは一八三一人が爆死した

何のために殺したのか 誰のために殺されたのか  
白地に赤い旗の下 くりひろげられた悪夢のかずかず  
虐殺されたアジアの民衆二千万 内外同胞三百万

あやまちはくりかえしませんと 誓ったわたしたち  
戦争放棄の第九条 けれど掃海艇は 軍艦旗をはためかし  
日の丸の波に送られて出港した

一度目はあやまちでも 二度目は裏切りだ  
くりかえすまい軍都広島 くりかえすまい軍港呉  
再びアジアに銃を向けまい 1991. 10. 3



今 本堂に掲げているパネル写真  
一九四二年 西善寺 梵鐘 仏具供出



ひょう が む よう

# 兵戈無用

兵隊も武器も用いる事なし  
(『仏説無量寿経』)

九月十八日 「平和の鐘」 浄土真宗本願寺派  
(一九三二 昭和六年 九月十八日 柳条湖事件)